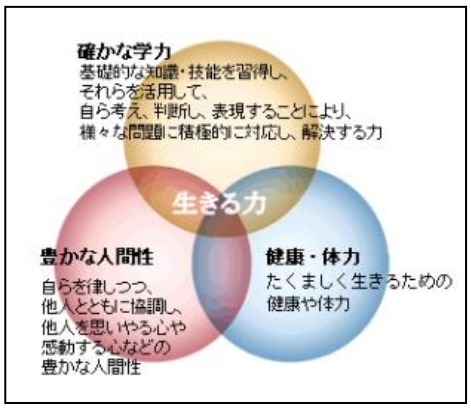
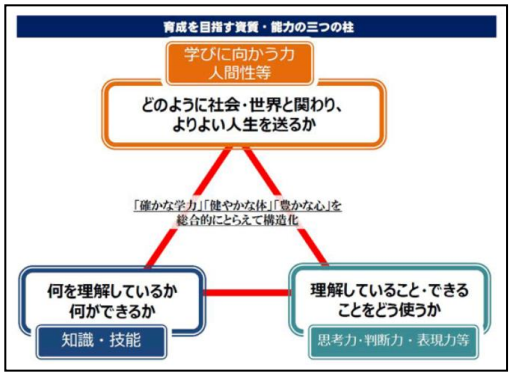
Ⅰ　研究の目的



平成２０年に示された現行の学習指導要領では、教育基本法の改正により明確になった教育の目的や目標を踏まえ、子供たちに知識基盤社会でますます重要になる「生きる力」をよりいっそう育むことが示された。「生きる力」とは、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康と体力」の３つの要素からなる力であると示しており、その要素の一つである「確かな学力」とは、知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたものとされている。



そして、今回の学習指導要領の改訂（平成２９年３月）では、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や改善を図るため、全ての教科等の目標及び内容を「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で整理された。

このような背景を踏まえ、本研究会では、「確かな学力」の向上に向けた取組みに着目し、平成２７年度より３年間、研究テーマを「確かな学力の向上に向けた取組みに資する調査」として、綾瀬市の子どもたちにおける確かな学力に関する諸問題の実態や要因を探り、問題の解決を資することを目的として調査及び分析を行うこととした。

Ⅱ　研究の過程

平成２７年度	４月～　９月	研究計画の立案、研究テーマの検討・決定
	１０月～１２月	予備調査内容の検討・決定と調査用紙の作成
	１月	予備調査の実施
	２月～　３月	予備調査の集計と予備調査結果の分析
平成２８年度	４月～　６月	研究計画の立案、本調査内容の検討・決定
	７月	調査用紙の作成、調査の実施
	８月～　３月	調査のデータ入力・集計・分析
平成２９年度	４月	研究計画の立案
	５月～　７月	調査のデータ分析、中間発表用資料作成
	８月	研究員研究発表大会において中間発表
	９月～　２月	報告書の構成の検討、報告書の検討・作成
	３月	報告書の完成、本発表に向けて検討

Ⅲ　調査の概要

１　調査の目的

綾瀬市の子どもたちにおける確かな学力に関する諸問題の実態や要因を探り、問題の解決を資することとして調査及び分析を行う。

２　調査方法

質問紙法によるアンケート調査

・児童・生徒については、学級単位で「調査実施マニュアル」にそって担任が説明しながら実施した。

・教員については、調査票を個人に配布し、学校ごとに回収した。

３　調査対象

小学校４年～中学校３年の児童・生徒及び教員

・小学校については、各学校の４～６年生の１クラスを抽出し、中学校については、各校各学年２クラスを抽出し、実施した。

・教員については、授業を担当している全ての教員を対象とし実施した。

４　調査人数

（１）児童・生徒　　＊欠席児童・生徒については実施せず

	学年別	対象者数（人）	回答者数(人)	回収率（%）
小学校	第４学年	２８２	２７３	９６．８
	第５学年	３１３	３０８	９８．４
	第６学年	２９５	２８５	９６．９
	小学校計	８９０	８６６	９７．３
中学校	第１学年	３３５	３１２	９３．１
	第２学年	３５７	３２０	８９．６
	第３学年	３４７	３２２	９２．８
	中学校計	１０３９	９５４	９１．８
総計		１９２９	１８２０	９４．３

（２）教員　　＊特別支援等の担任については、回答できる範囲内で回答

<table>
<tr><th></th><th>対象者数（人）</th><th colspan="6">回答者数（人）</th><th>回収率（%）</th></tr>
<tr><td rowspan="4">小学校</td><td rowspan="4">２４０</td><td>１～３年</td><td>４年</td><td>５年</td><td>６年</td><td>特別支援等</td><td rowspan="4">９５．４</td></tr>
<tr><td rowspan="2">８９</td><td>３２</td><td>２６</td><td>４０</td><td rowspan="2">４２</td></tr>
<tr><td colspan="3">９８</td></tr>
<tr><td colspan="5">２２９</td></tr>
<tr><td rowspan="4">中学校</td><td rowspan="4">１４４</td><td>５教科</td><td>４教科</td><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>特別支援等</td><td rowspan="4">８８．９</td></tr>
<tr><td>８３</td><td>２８</td><td>３８</td><td>３６</td><td>３７</td><td rowspan="2">１７</td></tr>
<tr><td colspan="2">１１１</td><td colspan="3">１１１</td></tr>
<tr><td colspan="5">１２８</td></tr>
<tr><td>計</td><td>３８４</td><td colspan="5">３５７</td><td>９３．０</td></tr>
</table>

５　調査期間

平成２８年7月１１日（月）～7月１５日（金）

６　調査項目について

児童・生徒調査と教員用調査で比較できるよう、共通の調査項目を設定した。小項目の問１については児童生徒用にはC1、教師用にはT1 と表記した。

共通の調査項目			
児童・生徒用		教員用	
1	学習形態（C1-C7）	1	学習形態（T1-T7）
2	学習形態の好悪(C8-C14)	2	学習形態の好悪(T8-T14)
3	学習状況の認知(C15-C24)	3	指導状況の自己評価(T15-T24)
4	学習状況の効用(C25-C34)		
5	学習の自己評価(C35-C42)	4	児童・生徒の学習状況の評価(T25-T32)
7	家庭等の時間の使い方(C44-C48)	5	家庭等での取組みの指導(T33-T37)
9	家庭学習について(C53-C56)		家庭等での取組みの指導(T38-T41)

その他の調査項目			
6	学習上の悩み(C43)	6	宿題の取組みについて(T42-T45)
8	家庭生活の状況(C49-C52)	7	学習指導上の悩み(T46)

７　分析の方法

（１）分析の方法

調査の分析は、統計ソフト「ＳＰＳＳ」を使用した。また、データの集約、統計的分析などのコンピュータ処理は、すべて教育研究所のコンピュータを用いて行った。

（２）数値の取扱い及び図表について

ア　データクリーニングでは、無回答・不明回答を欠損値として処理した。

イ　回答率（%）は、小数点以下第２位を四捨五入し、小数点以下第１位までを表記してある。そのため、回答率の合計が100%（99.9%または100.1%など）にならないものもある。

ウ　「Ⅳ　結果の概要」の小学生と中学生の比較、小・中学生の学年間の比較、小学校教員と中学校教員の比較、小・中学生と教員の比較等において、文中や文末に示される（*）印は、統計的に有意差があることを示している。

エ　「Ⅴ　結果の考察」の中のグラフについて、原則として４件法（①している－②どちらかといえばしている－③どちらかといえばしていない－④していない、等）の設問については、(①している－②どちらかといえばしている)のみをグラフ化し、数値についてはその合計値を表示している。

オ　「Ⅴ　結果の考察　２ Smile Teacher（教員調査から)」のグラフについて、特別支援等の回答は、個に応じた指導が予想されるため「小学全体」「中学全体」「全体」には含めていない。
例)・小学全体⇒ 小学校担当教員（特別支援等担当を除く）

カ　「Ⅴ　結果の考察　３ See gap and relation（児童・生徒調査と教員調査から)」のグラフについて、対象の児童･生徒とその担当学年の教員を並べて表示している。
例)・小学全体（小学４～６年生対象）⇔ 小学４～６年担当教員（特別支援等担当を除く）

Ⅳ　結果の概要

今回の調査結果の概要は次のようになる。小学生と中学生との比較、小・中学生と教員との比較等の記載については、有意に差があるものについては、「(*)」を付けている。

1　Student　First　（児童・生徒調査より）

（1）1【学習形態】、2【学習状況の好悪】

・「グループ学習」と「自己思考（一人で考える）学習」の好悪を比較すると、「グループ学習」の方が好意的で、「自己思考（一人で考える）学習」が好意的でない。(*)

・また、「教師設定課題学習」と「自己設定課題学習」の好悪を比較すると、「教師設定課題学習」の方が好意的で、「自己設定課題学習」が好意的でない。(*)

・つまり、一人で考える学習や能動的な学習に苦手感があると推測できる。

（2）3【学習状況の認知】、4【学習状況の効用度】

・ほとんどの項目で3【学習状況の認知】より4【学習状況の効用度】が高くなっているが、「思考時間（一人で考える時間）」については、効用度よりも認知の方が高い。(*)

・「評価内容の事前説明」と「その効用度」については、中学生になると、急激に評価内容の事前説明が増えたことで、その効用度も高くなっている。(*)

・子どもが感じている学習状況の効用度ベスト５は、１位「作業・体験の実施」、２位「話し合い活動」、３位「目標の提示」、４位「ICT 機器の活用」、５位「振り返り活動」である。

（3）5【学習の自己評価】

・「授業内容の理解度」と「学力全般の到達度」について比較すると、授業の内容はよく理解できているが、習得できた（学力の到達）とは思っていない。(*)

・「学習の自己評価」の項目について、全体的に減少へ転じるのは小学５年生と中学２年生である。小学５年生及び中学２年生において、発達段階に応じたより丁寧な指導や取組みが必要ではないかと推測される。

（4）6【学習上の悩み】

・「学習上の悩み」について、校種間で若干の違いがあるが、「外的な要因の悩み」、「学習方法についての悩み」、「自分が原因の悩み」の３つに分類することができる。また、小・中学校ともに「自分が原因の悩み」「学習方法についての悩み」が上位にきている。

・小・中学校の「学習上の悩み」の１位は、ともに「眠気等の体調不良」である。

・小学校から中学校にかけて、「学習方法が不明」の項目が大きく増えている。(*)

・小学生より中学生の方が、多くの悩みを抱えている。(*)

（5）7【普段の家庭生活の時間の使い方状況】

・「携帯電話やスマートフォン・パソコンで通話やメール、インターネットをする時間」において、１時間以上使用している子どもは、学年が上がるにつれ増加し、中学３年生では６割半ばに達する。(*)

・「テレビやビデオ・DVD を見たり、聞いたりする時間」おいて、１時間以上視聴している子どもは、全体で６割強である。
・「テレビゲームをする時間」について、１時間以上利用している子どもは、全体で４割半ばである。
・平日に１時間以上勉強している小学生は、学年が上がるにつれ減少しているが、中学１・２年生では５割半ばと小学校段階から有意に増加し、中学３年生では７割半ばまで増加する。(*)
・小・中学校ともに、平日より休日の勉強時間の方が少ない。(*)
・「学校外での読書時間」について、30 分以上読書をしている子どもは、小学５年生から小学６年生にかけて有意に減り、小学６年生から中学３年生については３割台を推移している。読書習慣のある子どもとそうでない子どもに分けられると推測できる。

（６）8【家庭生活の状況】　9【家庭での学習について】

・「家庭生活の状況」について、小学生の増やしたい時間の１位は「読書」で２位は「勉強」、中学生の１位は「勉強」で２位は「読書」である。
・「家庭生活上のルール」について、学年が上がるにつれて、家の中でのルールが決められていない割合が多い。(*)
・「家庭での学習」について、「授業の予習」、「授業の復習」、「宿題（課題）」を比較すると、予習に対する意識が一番低く、宿題（課題）に対する意識が一番高い。(*)

２　Smile　Teacher（教員調査から）

（１）1【学習形態】、2【学習状況の好悪】

・「講義形式の学習」及び「自己思考学習」については、小・中学校のほとんどの教員が実施している。
・「グループ学習」及び「ペア学習」については、小学校の教員が積極的に実施している。(*)
・「自己設定課題学習」について、教員は子どもが好意的に捉えていると思っているが、実施状況は５割以下であまり取り組めていない。

（２）3【指導状況の自己評価】

・「目標の提示」については、小・中学校ともに授業のはじめに目標を提示していると回答。
・「振り返り」については、「目標の提示」と比較すると低い。
・「発表機会の確保」及び「話し合い活動の実施」において、校種間で比較すると、小学校の方が実施していると回答。(*)
・「評価内容の事前説明」については、校種間で比較すると、中学校の方が実施していると回答。(*)

（３）4【児童・生徒の学習状況の評価】

・「教師の話等の傾聴」、「授業への集中度」、「授業へ理解度」については、肯定的な回答が８割を超え、小・中学校の教員はともに子どもたちに対する評価が高い。
・「友だちの話等への傾聴」及び「教員の話等への傾聴」について、教員の話はよく聞

けているが、友だちの話はあまり聞けていないと評価している。(*)
・「自分の考えを文章化すること」については、校種間でほとんど差がない。
・「授業内容の理解度」と「学習全般の到達度」について設問間で比較すると、小・中学校の教員はともに子どもたちに対して、授業内容は理解しているが、習得した（学習の到達）とは認識していない。(*)

（4）5【学校外の取り組みの指導】
・「携帯等の指導（スマートフォン、パソコンで通話やメール、インターネット）」「ＴＶ等の視聴の指導」「ＴＶゲームの利用の指導」の３つのうち、教員が子どもたちに一番指導しているのは「携帯等の指導」で、次に「ＴＶゲームの利用の指導」である。
・「家庭学習の指導」については、小・中学校の教員の多くが子どもたちに指導している。
・「計画的な学習についての指導」は、小学校より中学校の方が高く、中学校ではほとんどの教員が指導している。(*)
・「授業の予習及び復習の指導」では、「復習の指導」について多くの教員が子どもたちに指導している。また、校種間で比較すると、中学校の方が多い。(*)
・「宿題についての指導」は、小･中学校ともに多くの教員が宿題についての指導している。

（5）6【宿題の取り組みについて】
・「宿題の頻度」については、小学校の教員はほぼ全員が毎日出していると回答しているのに対し、中学校では毎日（毎回）出すことは小学校と比べると少ない。(*)
・「宿題の量」については、小･中学校ともに30分程度を想定して出している。
・「宿題について教員同士で話し合っている」については、小学校ではほとんどの教員が話し合っていて、中学校では話し合うのは約半数である。(*)

（6）7【学習指導上の悩み】
・学習指導上の悩みの１位は小・中学校ともに「教材研究等の時間不足」である。
・学習指導上の悩みについては、校種間で概ね一致している。
・経験年数が多いほど「基礎的・基本的な知識・技能の定着」への悩みが増加している。(*)
・経験年数が少ないほど「苦手な学習への取り組ませ方」「児童・生徒へのかかわり方」に悩みがある。(*)

3　See gap and relation（児童・生徒調査と教員調査から）

（1）1【学習形態（児童・生徒）】、1【学習形態（教員）】
・「グループ活動」及び「ペア学習」について、中学生は多く行われていると感じているのが、中学校教員はあまり行っていないと回答しており、ずれがある。(*)
・「自己設定課題学習」について、子どもたちは行われていると感じているが、教員はあまり行っていないと回答しており、ずれがある。(*)

（2）2【学習形態の好悪（児童・生徒）】、2【学習形態の好悪（教員）】
・「講義形式の学習」及び「教師設定課題学習」については、教員が思っているよりも

子どもは好意的である。(*)

・「少人数学習」及び「自己設定課題学習」については、教員が思っているよりも子どもは好意的でない。(*)

（3）3 4【学習状況に認知・効用度（児童・生徒）】、3【指導状況の自己評価（教員）】

・「目標提示」について、子どもも教員も実施していると認知していて、子どもはその効用度も高いと回答している。

・「振り返り」については、「目標提示」と比較すると実施状況が低い。しかし、子どもたちが思う効用度は、どの学年も約９割と高い。

・「発表の機会」については、発表の機会もその効用度も学年が上がるつれ、減少傾向にあり、教員の自己評価とも一致している。

・「外部人材の活用」については、教員の外部人材の活用の自己評価はとても低いが、子どもが感じる効用度は非常に高い。(*)

・「評価内容の事前説明」については、小学校は、児童の認知と教員の自己評価が低くなっているが、中学校はともに高い。(*)

（4）5【学習の自己評価　（児童・生徒）】、4【児童・生徒の学習状況の評価（教員）】

・「意見等の発表」については、中学校においては、子どもの自己評価より、教員の評価の方が高い。(*)

・「友達の話等への傾聴」、「教師の話等への傾聴」、「自分の考えの文章化」、「話し合いでの思考深化」、「授業内容の理解度」については、子どもの自己評価より、教員の評価の方が低い。(*)

・「授業への集中度」については、子どもの自己評価も、教員の評価もともに高い。

・「学力全般の到達度」については、小学校では、子どもの自己評価よりも教員の評価のほうが低く(*)、中学校では、子どもの自己評価よりも教員の評価のほうが高い。(*)

・「授業内容の理解度」と「学力全般の到達度」について、設問間で比較すると、子どもも教員もともに、授業では理解できているが習得できた（学力の到達）とは思っていない。

（5）7 9【普段の家庭生活の時間の使い方（児童・生徒）】、5【学校外の取り組みの指導（教員）】

・「携帯等の利用時間（スマートフォン、パソコンで通話やメール、インターネット）」、「TV 等の視聴時間」、「TV ゲームの利用時間」について、教員が継続的に指導していると考えられるが、全国学力状況調査での全国平均と比較すると、いずれも利用等の時間が長く、課題であると言える。

・「家庭学習」についても、教員が継続的に指導していると考えられるが、中学校では増えてきているものの、全国学力状況調査での全国平均と比較すると学習時間が短い。学習習慣を早い時期から身につける必要があると考えられる。

・「学校外での読書時間」について、よく本を読んでいる子どもと、そうでない子どもの二極化が見られる。

・「計画的な家庭学習」について、教師の「指導している」と回答している割合に対し

て、子どもたちの「実施している」と回答している割合は少ない。また、教員の指導について、中学校ではほとんどの教員が指導している。

・「授業の予習」について、全体的に実施状況は半数以下である。その指導については、校種間で差がある。

・「授業の復習」について、全体的に実施状況は「授業の予習」よりも多く、校種間でも差が見られる。

・「宿題」について、全体的に実施率・指導率ともに高く、小学校の方が実施率・指導率ともに高い。

4　Study　Homework（家庭学習力の重視・習慣化）

・「学力が高いと推測できる子ども」は、家庭学習の時間が長く、携帯等（スマートフォン、パソコンで通話やメール、インターネット）の使用時間が短い。

・「学力が身に付いていないと推測できる子ども」は、家庭学習の時間が短く、テレビ・ゲーム・携帯電話等の利用（視聴）時間が長い。

・子どもたちは授業で理解したと感じていても、習得できた（学力の到達）とは感じていない。

・「学力が高いと推測できる子ども」と「学力が身に付いていないと推測できる子ども」との間には、家庭学習の時間が大きく影響している。つまり、子どもたちに「家庭学習力（家庭学習を自主的に行う力）」を身に着けさせることが大切である。

・学力が低い子どもは学習意欲も低いとみなされることが多いが、そうではない。様々な場所で学力に関する自尊感情が傷つけられており、学習意欲が失せてしまっている。学力が低い子どもには、確かな学習習慣をつけることが先決である。

・家庭学習の仕方や取り組む姿勢をきちんと指導して、「確かな学習習慣」を身に着けさせる。それが最終的に「家庭学習力」につながる。

5　School　Management（学校・綾瀬市の取組みとして）

・学校のすべての教員がビジョンを共有し、ベクトルをそろえる。

・いろいろなことに取り組むのではなく、重点を置く所についてのみ注力する。

・成果が出るまでぶれずに継続する。

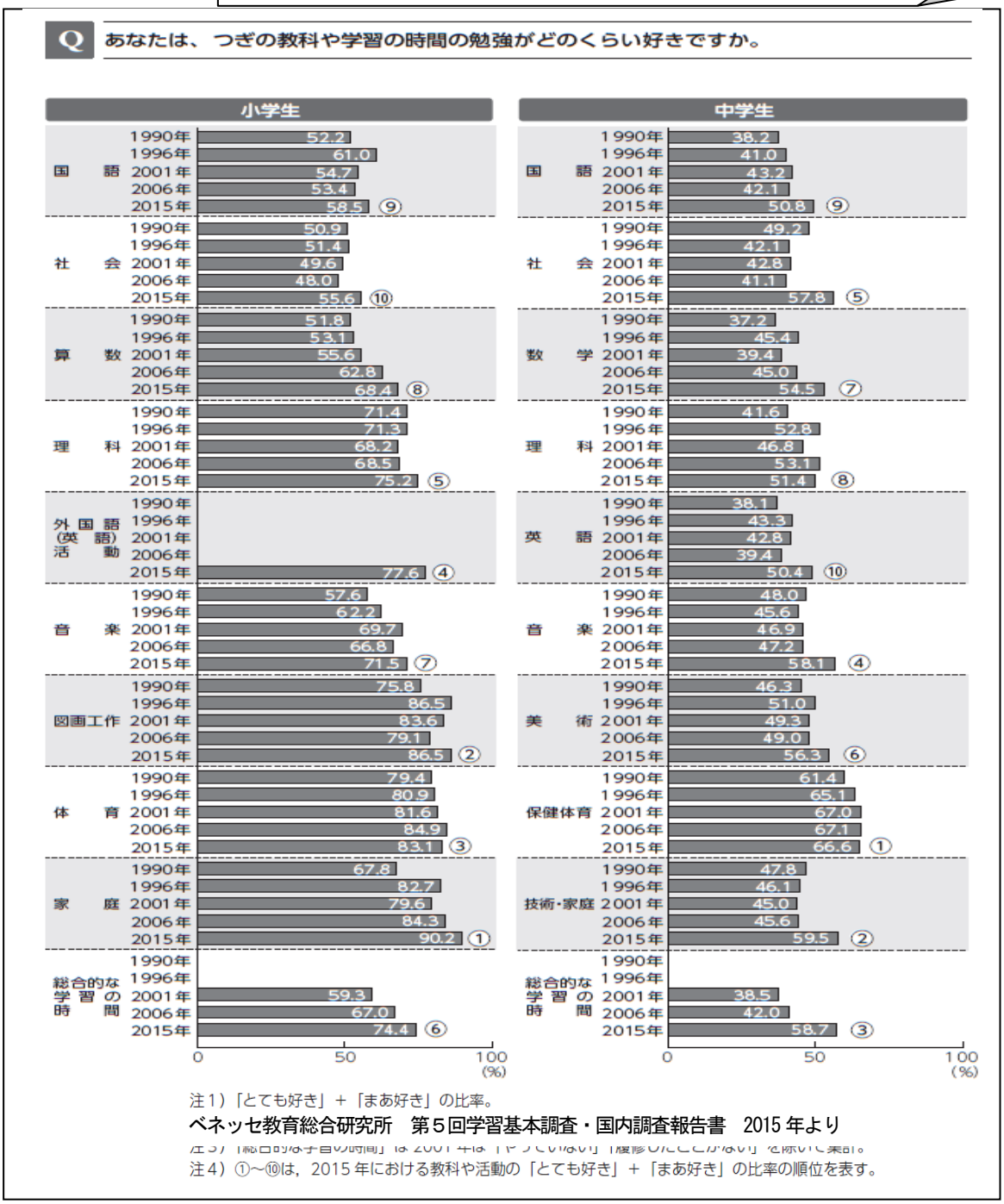
・宿題の課題の出し方なども、学校で統一して協力していく。

・綾瀬全体で統一された取り組みとして、小学４年生から中学３年生まで継続する。

例）　○３回の復習
　　・授業終末、帰りのＨＲ、家庭学習での振り返り
　　○家庭学習時間の設定
　　・１日最低１時間以上は取り組む
　　○小学４年生から中学３年生まで継続
　　○宿題課題の統一
　　・基礎計算、漢字、英単語習得、短作文（日記）等
　　○読書・音読
　　○自主学習ノート

コラム

小学生が一番好きな教科は「家庭」、中学生は「保健体育」。



高校

２年生を対象に「第

図１　教科や活動の好き嫌い（小学生・中学生）、経年

図１は、その結果です。

○2015 年調査で、小学生の「好き」の比率が一番高かったのは「家庭」の 90.2%でした。これは、1990 年調査の 67.8%から比較すると 22.4Ｐの大幅増加となりました。

○中学生の「好き」の比率が一番高かったのは「保健体育」の 66.6%でした。また、前回 2006 年調査と比較して大きく「好き」が増加したのは「社会」と「総合的な学習の時間」でした。